

基礎研究部門 西域総合研究班

第二次大谷探検隊のモンゴル調査

——クーロンからエルデネ・ゾー僧院まで——

村 岡 倫

はじめに

西本願寺第22代門主、大谷光瑞師が結成した大谷探検隊と言え、将来した数多くの中央アジア出土の文書、あるいは仏像・絵画などの仏教美術などによって、中央アジアの探検がまず思い起こされよう。しかし、それだけでなく、探検隊がアジア各地で調査を行っていたこともまたよく知られており、1908年に派遣された第二次探検隊の隊員である橘瑞超・野村栄三郎も、中央アジアに入る前にモンゴル高原を経由しており、その間の調査について詳細な記録を残している。

彼らのモンゴルでのフィールドワークはこれまであまり注目されたことはなく、専論としては北村 1998があるのみである。近年では、フスレ 2011が、明治時代における日本人の外モンゴル調査を取り上げる中で、橘・野村の調査についても触れ、相馬 2014は、「総合人類学者」と言われる著名な鳥居龍蔵のモンゴル調査と共に、大谷探検隊のモンゴルにおけるフィールドワークとその記録の意義について論じた。最新では、白須 2022が、第二次探検隊の当初の計画を、清国の档案資料から検討する中で、モンゴルでの探検隊のルートについて触れている。

探検隊の活動記録の集成である『新西域記』には、野村栄三郎の「蒙古新疆旅行日記」が収録され（以下、「野村日記」と略）[野村 1937]、また、同書には未収録であるが、橘瑞超による『使命記』もあり [橘 2001]、当時のモンゴルを知る上で、たいへん貴重な資料と言える。それらによれば、1908年（明治41年）6月16日に北京を出発した二人は、25日に張家口で万里の長城を越え、1か月以上かけて内モンゴルからゴビを縦断し、7月29日にモンゴルの中心都市である庫倫（クーロン、現在のウランバートル）に到着した。

その後の旅程についても橘・野村はその関心から、旅の途上にあった寺院に関して詳細な記述を残している。モンゴルは、1924年にソ連の影響化で社会主義国家となるが、探検隊が訪れた30年後の1937～8年ごろ、革命政府の弾圧によって、数多くの寺院が破壊され、その際、全国で3万人もの僧侶が殺害されたという。その後、1990年代の自由化により、多くの寺院は再建された



図1 村岡 2020 : 136

が、探検隊が訪れたころの威容を取り戻せていない。その意味でも彼らの記録は、当時のモンゴルにおける仏教、特にチベット仏教の隆盛を知る上でも重要である。

彼らの探検から100年以上、その旅程をたどった総合的な実地検証などが行なわれたことはなかった¹⁾。筆者は、彼らのモンゴルの旅程を、断続的にはあるが、何年かにわたって現地で検証・調査したことがある。本稿は、その研究成果の一部である。ここで取り挙げるのは、広大なモンゴル高原を南から北へ、そして西方へと3000km超、101日間にわたった探検隊の旅程（図1参照）のほんの一部に過ぎないが、今後なされるであろう総合的な実地検証の端緒としての意味を持てれば幸いである。

1. クーロンから西方へ向かう中継地点ハダットへ

クーロンに到着した橋・野村は、しばらく滞在し、様々な手続きの後²⁾、8月7日に出発した。一行は、二人のほか、通訳1名、従者2名、モンゴル人1名、護衛兵1名、ラクダ10頭、馬7頭のキャラヴァンであった〔野村 1937 : 455、北村 1998 : 75〕。

一行は、清朝が交通路上においた駅伝施設である軍台を利用した。そこには宿泊施設があり、食事をとることも旅の必需品を手に入れることもできた。クーロンから南下してサイルス（賽魯烏蘇）軍台まで南下し、さらにそこから西方に向かい、オンギ軍台を目指したが、8月16日、その途上の哲林軍台近くの寺院で、僧侶との交流があった。「野村日記」には、次のように記されている（「野村日記」の書式に合わせて日付を示す。原文の漢字は旧字であるが、ここでは新字とする。仮名遣いはそのままにした）。

「八月十六日」

此の地（哲林台）の北約千米に廟を見て之を訪ふ。門に到れば喇嘛僧は驚きて内に逃る。門

に入らんとせば三僧来る。余等は先づ所持の念珠を示す。一僧は稍々意を安んぜる如く、赤帛を身に著けて余等を導く。堂の中央に仏を安じ、八僧禪坐して経を誦し、傍らに椀に粟及び乳を盛りて持せる児童三四人あり。出るに際し僧二人に巻煙草一本づつを与ふれば大に感謝せり。〈中略〉午後二時発して西北に進む。四時前頭遙かに白点々を望む、是れ恩依錦（オンギン）軍台なり【459-460】（以下、典拠の〔野村 1937〕は略し、記載される頁のみ【 】で示す。橘 2001「八月十六日」にも同様の記述がある『158-159』。以下、〔橘 2001〕についても、記載される頁のみ【 】で示す）。

オンギ軍台は現在のドンドゴビ県サイハンオボー郡にあったと考えられ、おそらく、ここに記されている寺院とは、現在も名利として有名な「オンギン・ヒード（オンギ寺）」と考えられる（オンギの位置については図1・図2参照）。

前述のように、モンゴルでは、1937～8年、革命政府の弾圧によって多くの寺院が破壊され、僧侶も数多く殺害された。オンギン・ヒードでも僧侶全員が粛清され、建造物も取り壊されている。しかし、自由化に伴って寺院は再建され、人々の尊崇を集め、今や常時300～400人の僧侶が活動しているという。参拝客や観光客も訪れ、それらの人々のために近くに多くのツーリストキャンプが敷設されるなど、ここは昔の盛時の様子を取り戻している感がある。

オンギ軍台を出発した後に、ウヌカツ軍台を経由し、哈達図（ハダット）という地に到着する。ここは、交通路上たいへん重要な地と思われ、「野村日記」には次のようにある。

「八月十七日」

午後二時発して西北に進み、2回道を問ひ、過程と時計に考ふるに極めて不可解の一村落に着す。是れ哈達図なり。後ちに聞くに風位と用水の都合を以て村落の転移せるなりと。過程六十五清里、時は六時四十分。此の地の遥かなる四囲に山あり。家十九戸…【460】。

「八月十八日晴又小雨 哈達図滞在」

元朝の遺址和林に向はんとする準備に滞在す、携帯品は、…〈中略〉残荷二十九個は当地に預け置く。却説和林行の駱駝と馬匹使用を昨夜より交渉せしも、台員は云ふ。庫倫より烏里雅蘇台に赴く外人二名、支那人二名、蒙人二名の旅行を通知し来れるのみ。駱駝等は土人の所有に非ざれば金銭を以て使用するを得ずとて、極めて強硬に拒絶せり。依って台員一人と蒙古衛兵に煙草百本を与へ、且つ余等は和林を見んが為め遠く来る、若し赴くを得ずば直ちに北京に帰らんのみと、百方説く所ありしに、遂に駱駝三頭と乗馬を供給することを諾せり。

又綿羊二頭を得【460】（橘も、17日の「ハクト」到着、18日の滞在を記す『161』）。

「八月十八日」に見える「和林」とは、モンゴル帝国が築いた草原の都「カラコルム」のことであり（本来の漢字音写は「哈刺和林」であるが、『元史』をはじめとする漢籍では「和林」とのみ記されることが多い）、大都（現在の北京）に都が遷された後も、元朝時代を通じて重要な都市であった。元朝崩壊後は廢墟となっていたが、16世紀末、この地にモンゴルにおけるチベット仏教の総本山として、エルデネ・ゾー僧院が建設され、人々の尊崇を受けていた。橘・野村の

モンゴル調査行最大の目的地でもあった。上記の野村の言にも、交渉が難航する中、和林に行けないのなら、このまま北京へ帰るという決意が示されている。

何とか交渉をまとめ、ハダットに中央アジアへ向かう際に必要な29個もの荷物を預け、西方への道を外れ、北に向かうことになる。この後、エルデネ・ゾーやカラコルム地域の調査を終えて、再びこの地にもどったのは9月4日のことであった。預けた荷物を受け取り、装備を整えた【475】後、中央アジアへ向けて西方へ旅立つことになる。橘も「和林に向かはんとするものはハタトよりする也」と言い【161】、「連日経由の軍台路を離れて和林探査の途に就く」というように【162】、ハダットが交通路の要衝であることは間違いない。

しかし、『新西域記』に附された地図（図2）や他にも「哈達図」の記載がある地図はあるものの（例えばボズドネフ 1908：421。本文でも、257-259に「哈達図」について記すところがある）、現状ではこの地の比定はできていない³⁾。私の現地調査でも明らかにできなかった。野村は、8月18日時点での戸数が19戸と言い、9月4日では、「節は冬季に近く為此の地に集合せるものか、家は増して四十戸許」と述べるように【475】、あまり大きな集落ではないということもあろうし、そもそも「ハダット」という地名自体が、モンゴル語で「岩山（岩石）がある」という意味で⁴⁾普通名詞でも使い、今も各地に見える地名である。また、野村が言うように、ここは風位と用水の都合を以て転移せる村落で、そのためか「不可解の一村」とその印象を述べている【460】。交通の要衝でありながら比定しがたいのは、それらの理由によるものではないだろうか。ハダットの比定は、清朝時代の軍台の研究、あるいはモンゴル高原の交通路の研究にとって重要な課題であろう。

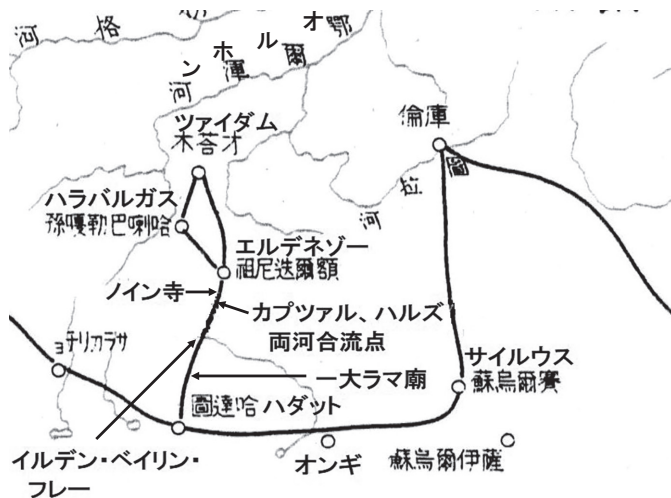


図2 『新西域記』上巻掲載の地図に加工・加筆

ここからカラコルムに向けて北上した以降も、例えば、「八月十九日」に通過する「ブリート村」、「トンドルト村」、そして、この日宿泊した「ダイリック」などの地名【460】、「八月二十日」～「八月二十一日」にも「フイトンフンジン」、「ホーダイホツカ」、「オイリコム」という地名が登場するが【461】（橘は、同19日に通過した地を「ブリート村」、「シヨボール」という村、「チヨドート村」、20日～21日に通過した地を「フイトンフンジン」、「ホーダイホツ」、「オイリコ」と記し『163-167』、野村と共通する地名もあるが、齟齬も見られる）、私の調査では今のところ比定できていない。清朝時代の地名は、清朝から独立した際に多くが変更されたとも言われるが、これらについても引き続き検証が必要であろう⁵⁾。

2. ハダットから北上し、エルデネ・ゾー僧院へ

オンギ軍台以降、橘・野村の旅程で現在の地に明確に比定できるのは、「八月二十一日」に見える次の地名である。

此処（オイリコム）を發し峠に登り氣圧計にて検するに、三百五十呎を示す。之を降れば山腹に人家あり、是れフーレーの一部なり。降り尽せる河岸の石路を進む。河は鄂不歡河の上流なり。河幅三百二十米許、水少し。氈帳二十五、前方に華麗なる廟を見る、此地フーレーと名く。具にはイツデンベークフーレーと云ふ【461】。

ここで言う「イツデンベークフーレー」（橘は「イツデンベリー」とする『167-169』）は、正確には「イルデン・ベイリン・フレー」⁶⁾であることを現地で確認している。「イルデン・ベイレ」はこの地の領主であったという。その人物に関連するフレーという意味である。「ベイレ（貝勒）」は周知の如く、清朝が、皇族・モンゴル王公の大部分、あるいはチベット・回疆の一部貴族に授与した爵位の一つである。

後にカラコルムからハダットに戻る復路途中の「九月二日」に「アルテンベール」という地が「野村日記」に見えるが【475】、これも「イルデン・ベイレ」のことであろう。「野村日記」は同じ地名の表記を、カタカナでも漢字でも、個所によって違えているところがある。

野村は、続いて次のように記している。

白塔は山腹に点在し、オルホン河の水声は元朝の盛時を語るに似たり。更に進みてオルホンゴロに憩ふ。時に十時三十分、駱駝と馬を飼養するを得ず、為に此に宿す。此の地露人の商估数人ありと。フーレーの前山の半腹に白色蒙古文を書す【461】。

橘は、これを「西藏文字にてオンマネバドメホンを記す」と言っており『168』、これがチベット仏教徒によってよく唱えられている真言（マントラ）であることはよく知られており、現在もイルデン・ベイリン・フレーの山の中腹に、モンゴルの国旗にもあしらわれているソヨンボの文字記号（以下、「ソヨンボ」と称する）とともに、チベット文字でその真言が白く記されている（写真1。写真は巻末に一括して示す）。現在の文字は、探検隊が見たものそのままではないだろ

う。しかし、彼らが訪れた時から今に至るまで描き直されながら、受け継がれたものと思われる。

また、現地の遊牧民から、ここには、かつて、ロシアからの商人が店を構えていたことも聞き取っており、以上のことから、「野村日記」に記される「イツデンバークフーレー」は「イルデン・ベイリン・フレー」で間違いない（この地を含め、これ以降の旅程についても図2参照）。

ちなみに、「野村日記」に「オルホンゴロ」という語が見える（「ゴロ」は「ゴル」で、モンゴル語では「河」の意味）。さらに「オルホン河の水声は元朝の盛時を語るに似たり」とも言うが、モンゴル・元朝時代の史料に散見する著名なオルホン河は、もっと北方にある。それこそ、これから彼らが目指すカラコルムやエルデネ・ゾーの地を流れる河である。現地を確認したところ、この「イルデン・ベイリン・フレー」に流れる河は「ゴルホン・ゴル」とい、オルホン河とは関係がなく、前述のオング河の支流である。「ゴルホン」は「淀みなく流れる」という意味であるらしい。これを野村らが聞き間違い、有名なオルホン河と混同したものであろう。

野村は、この地で「華麗なる廟を見た」と言うが、これも1937～8年に破壊されたようであり、今は地表のあちこちに、建築址の基壇だけが残されている。現在はやはり自由化以降に再建された寺院や白塔がある。

ここでは、地名として明確な「イルデン・ベイリン・フレー」を挙げたが、実はもう一つ、筆者が考える比定できる地を指摘しておきたい。「イルデン・ベイリン・フレー」に到着する1日前の「八月二十日」に次のような記述がある。

二三の水流の南に注ぎし跡を過ぎ、左方山下に一大喇嘛廟ありて、庫倫以来初めて見る大建築なり。周囲に喇嘛の居所多く、又白塔を見る。氈帳四五も点在す。廟より東に偏して進む十清里、恩依河を見る【460-461】。

野村は、クーロン以来、初めて見る大建築として、「一大喇嘛廟」と称するチベット仏教寺院を挙げている。橘も、「丘前に一大廟を見る、最大の建築物にして活仏と尊崇せらるる上級喇嘛僧の居住せる所なり」と言う【165】。

「イルデン・ベイリン・フレー」の手前（南方）であること、オング河が東十清里（一清里は576m）にあることなど、その位置関係を踏まえると、この地は、現在のアルバイヘルという町とほぼ重なる。この町は、探検隊が通過した際にはなく、その23年後の1931年に建設された。現在、町にはチベット仏教寺院があるが、現地で行なった聞き取りによると、アルバイヘルができる前からあり、かつては広大な敷地を持つ巨大な寺院であったという。北門があったとされる地に門の礎石が残っている。しかし、やはり1937年に跡形もなく破壊されてということであった。これこそが、野村が記した「一大喇嘛廟」だったのであろう。今はかつてのその広大な敷地の北門跡の反対側、南片隅に小さな寺院が再建されており、ここも、アルバイヘルや近隣の住民の信仰を集めている。

一行はさらに北上した。「野村日記」に次のようにある。

「八月二十二日」

下り尽くせば右方は幅四百米許の涸川あり。左方家八九、川に沿ひ北に進む。川は北流して少しく水を見、暴漲の跡は水田に似たり。川に沿ふ五十清里許にして方二万米許の広原に出づ。川は両派して東流をカプチャラ河、北流をハルワネ川と名くと云ふ。此処にて天暮れ七時三十分、導者路に惑ひ幾逡巡、瀦沼を跋涉して九時にバインドウロに着す。此の地は二河の会注点にして、鴨、家鴨等の水禽多く、土人懇切にして昨駅に正反す【461】。

ここで記される両河は、正確には「カプツァル河」「ハルズ河」である。現在も二つの河の合流地点は風光明媚な草原である。少し離れた東の山間が現在もバイントーローと呼ばれている。「トーロー」という植物が「豊か（バイン）」であることから名づけられたという。

両河の合流地点からバイントーローの逆の西方遠くに寺院が見える。これは、「野村日記」に記される、次の寺院である。

「八月二十三日」

午前十時出発。約十清里にして西方の山腹と、右岸山麓に各一寺院を見る。左寺はノインと称し、右寺は知らず。共に白色の建物に白塔ありて、周囲に喇嘛の宅あり。路は自ら右寺に通ず。近づき見れば赤、緑、白等の屋蓋を有する建物十一二棟あり【461】。

橘は「ノインラマーフーレー」と言う【171】。現在、この地はシャンハと呼ばれ、カラコルム（現在はハラホリンと発音する）の南約25kmにある。寺院も「シャンハ・ヒード」と呼ばれているが、これがかつてのノイン寺である。オンドルゲゲーン・ザナバザル（17世紀の初代活仏ジェブツンダンバ・ホトクト。ウランパートルに彼の名を冠した国立ザナバザル美術館がある）によって創められた。かつては、ズーン・フレー（東のクーロン）に対して、バローン・フレー（西のクーロン）と呼ばれ、大いに栄えた。数千人の僧が修行していたが、ここも、宗教弾圧の際に破壊されている。

菅沼 2004によると、「現在は廢墟のような境内に、本尊をまつて読経などを行なう本堂だけが再建され、約40人ほどの僧がその周辺のゲルを僧房がわりにして住んでいる」というが〔菅沼 2004：47-48〕、現在はそれから18年を経て、さらに建物も新しいものが建造されてはいるが、人影はまばらである。今ある寺院は野村が言うノインと称された「左寺」であり、「右寺」は再建されなかったようだ。

3. 探検隊のエルデネ・ゾー僧院内のカラコルム関連碑文調査

ノイン寺を後にした二人は、同日8月23日、ついにエルデネ・ゾー僧院に到着する。彼らは正門である東南の門より城内に入った。この門は、野村は「東南門」と言っているが、当時は通常「南門」と呼ばれていた（写真2）。正確には東南に面しており、その意味では、野村は実状を記したと言える。現在は「東門」と呼ばれている（【463】に野村作成の図面がある。図3参照。ただし、碑文が並ぶ後方に、卍マークが付されているのは現存するゴルバン・ゾーと思われるが、

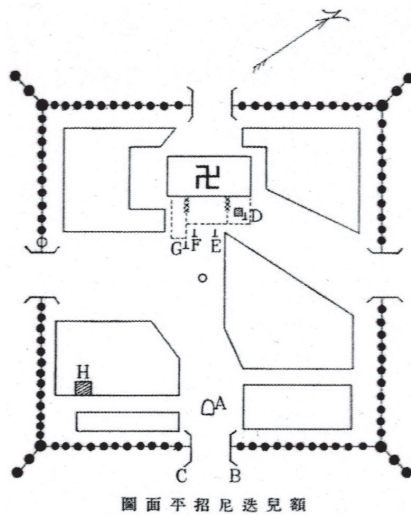


図3 手前の門が「東南門」【463】

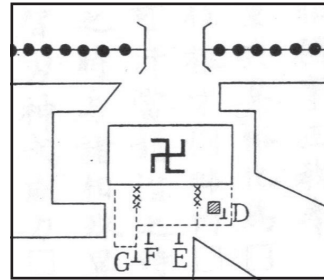


図4 野村が記す碑文の位置【463】

実際はもっと左側寄りに描かれるべきである。その点は、橋の図面の方が正確である〔122-124〕。

野村・橋のエルデネ・ゾー調査で注目されるのは、城内にある碑文への関心が高いことである。実は、エルデネ・ゾーには、モンゴル帝国時代の旧都カラコルムに関連する碑文が数多く残されていた。それは、16世紀末にエルデネ・ゾーが建立された時点で、その北側には、14世紀後半に廃墟となったカラコルムの遺址があり、残された石材をはじめとする様々な資材が、僧院の建設に再利用されたからである。形が整っている碑石は利便性が高く、そのため、それらはもとのままで信仰のシンボルを刻して参拝に利用されたり、あるいは適当な大きさに裁断され、エルデネ・ゾー内の建造物の資材に使われるなどした。19世紀末にエルデネ・ゾーを訪れたロシアのラドロフは、碑石の拓本や写真をとり、出版した〔ラドロフ 1892〕。野村は、碑の位置を自ら作成した図面に書き込んでいる。図中に見える A～G である（図3）。

筆者は、1996年から始められた日本・モンゴル共同調査「ビチエース・プロジェクト」（開始時は日本側代表：森安孝夫、モンゴル側代表：A. オチル、「ビチエース」とはモンゴル語で「碑文」の意味）のメンバーである。現在も、特にモンゴル帝国時代を中心にプロジェクトは進行中であり、この間、エルデネ・ゾー内に残っていた碑について研究を進めてきた〔主な成果として松田孝一・オチル 2013〕。その成果を踏まえて、探検隊が訪れた当時の A～G の碑について検証したい。

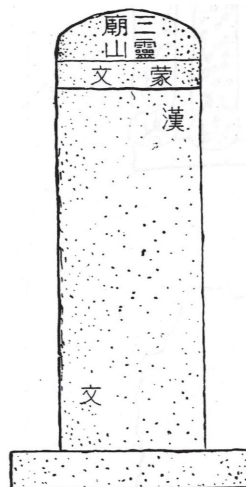
野村が、「八月二十三日」に

既にして東南門を入り十六米の所に一碑を見る。花崗石にて作り、北西に面するが、僅かに至元の年号のみを読むべし【461】。

と記すように、東南門から入城した彼らの目にまず止まったのが A であった。この碑は、現在

も同じ場所に立っている。野村はこれを「三靈山廟碑」と呼ぶが【463および464】、正しくは「剏建三靈侯廟記」である。ラドロフ 1892: XLVII-2 に拓影が掲載され（『和林金石録』21b-23b に録文がある）、ピチエース・プロジェクトでも採拓・研究がなされた [中村 2013]（拓影は写真3）。野村は題額を「三靈／廟山」と読んだが（図5）、これは、後世、題額の上に、ガリック文字でオンマニパドメフウムと刻されたため（野村はこれも誤まって「蒙文」としている）、本来は「三靈侯／廟之記」であるのに、「侯」の文字が見えにくくなり、「之」の篆字の上の部分しか見えず（確かに「山」に見える）、次の「記」も見えにくく、このように誤ったのである。しかし、ガリック文字が刻されている箇所をよく見ると確認はできる。野村は、「至元の年号」がわずかに読み取れるとしているが、図には、「至正己卯仲夏吉日」と誤って記している【464】。正しくはやはり「至元己卯（1339）」である。

彼らは翌24日、「朝食後直ちに南門前の碑を三枚搦り、南門角に嵌入刻石を摺りて一旦帰寓す」とあるように、南門（先に野村が言っていた「東南門」）角に嵌め込まれている碑石にも触れている【462】。図中のBCである。これは「和寧郡忠愍公廟碑」であり [松井 2013]、かつて碑陰を露出させた状態で嵌め込まれていた（ラドロフ 1892: XLIII-3・4 に拓影があり、『和林金石録』21a に録文がある）。彼らは「剏建三靈侯廟記」の拓本を三枚（橋の『177』に拓影が載せられている）、「和寧郡忠愍公廟碑」も採拓したという。



平面圖 A 點の碑形、
 尺寸既記 高一米六十、
 厚〇米三十一、
 石質は花崗石、
 至正己卯仲夏吉日立石、

図5 「剏建三靈侯廟記」の野村によるスケッチ【464】

2005年、エルデネ・ゾー内の碑文資料の保存・管理を進めるため、寺院内の欄干・門柱・石柱などに嵌め込まれている碑石数点を取り外して新たな拓本が採取され、その後、2011年新設のカラコルム博物館に移管された。この「和寧郡忠愍公廟碑」もしかりであった。その際に、露出していた碑陰とは逆の碑陽の内容が初めて明らかとなった〔松井 2013 : 33〕。したがって、探検隊が採った拓本はラドロフ同様、碑陰だったことになるが、彼らが採拓した「翺建三靈侯廟記」、「和寧郡忠愍公廟碑」両碑の拓本は、現在、所在が不明である。

その後、彼らは「廟前」（野村が「卅」で記すゴルバン・ゾー、「三つの寺」という意味で、その名の通り、西寺・中寺・東寺三つの寺が並ぶ）の碑文（つまり D～G の碑。図 3、4）も同様に採拓しようとしたが、ラマ僧や現地の人々に拒まれた。彼らは頑強に遮り、野村たちを切り殺すのも厭われないような勢いであり、さすがに無理強いはず、拓本を採ることを断念したという【462】〔179-180〕。

かつて筆者は、それら D～G の碑石について、「ビチェース・プロジェクト」の調査対象となった碑のどれに当たるか、検討したことがあった〔村岡 2012〕。前述の二つの碑以外で、エルデネ・ゾー内にあったことが知られている碑は、「和林兵馬劉公去思碑」、「ヒジュラ暦742年のペルシア語碑文」、「嶺北省右丞中総管収粮記」、後世碑面が磨かれ、新しくチベット文字が大きく刻され、二つに割れた碑の四つである。

比定するに際し、考える材料としたのは、野村が記した碑石のサイズと我々が実測したサイズの比較であった。しかし、両者の数字は微妙に一致しない。上記のような状況下で、慌てて測らざるを得ず、正確なサイズを記載できなかったのだろうと推察し、結局は碑相互の大小関係によって、一応の結論を出したに過ぎなかった。

しかし、その後、20世紀初頭から半ばに至るまでのエルデネ・ゾー内の写真集、バーサンスレン 2011 を手にしたのであるが、そこには、それらの碑が写り込む写真が掲載されていた。ここでは、写真に見えるそれぞれの碑が立つ位置とその形体から、D～G の碑石について改めて比定しておきたい。

まず G は、「ヒジュラ暦742年のペルシア語碑文」である。これは、1341年の立石であり、ハーンカーというムスリムの修行道場兼宿泊施設を建造した際の記念碑である（ラドロフ 1892 : XLVIII に拓影がある。宇野／村岡／松田 1999、磯貝／矢島 2007、2013 参照）。バーサンスレン 2011 : 26-27 に、見開きで仏教哲学の学院の写真があり、この碑が写り込んでいる（写真 4）。この碑の特徴である碑陽に刻されたソヨンボがかすかに見える（写真 5）。この学院も破壊され、現存しないが、破壊前のエルデネ・ゾー僧院の姿を描く図面から（バーサンスレン 2011 の巻頭など）、かつてはゴルバン・ゾーの手前で西門（現南門）寄りにあったことがわかる。学院が破壊された後も、そのまま同じ場所に置かれ、2011年にカラコルム博物館が建設されると、そこに収蔵され、現在は館内で展示されている。

F は「嶺北省右丞中総管収粮記」である〔松川／松井 2013〕。F の碑は、野村の計測によると、

「高二米八十三、幅〇米九十五、厚〇米三十五」だという【463】。他の碑は全て2mに満たない。ビチェース・プロジェクトで1998年に行なった計測でも、碑面の長さが234cmあった（ラドロフ1892:XLV-1・2に拓影があり、『和林金石録』28aに録文がある。松川／松井2013参照）。バーサンスレン2011:38の写真に見えるのはこの碑である（写真6）。写真の碑は上部に紙が貼られ、3行のモンゴル文字が見えており、「嶺北省右丞中総管収粮記」の碑陰に間違いない（写真7、松川／松井2013:177）。我々が調査、採拓した際には、この碑は、前述の「三靈侯廟碑」から150メートルほど後方の草むらに放置されていた。台座を発見することはできなかったが、写真6に見える碑は台座に乗っており、もし、この台座が高さ50cmほどであったとすれば、野村の計測は、この碑に関しては正しかったことになる。城内の建物の破壊が始まったどこかの段階で、草むらに打ち捨てられたのであろう。現在は、前述のペルシア語碑文同様、カラコルム博物館に移管された。

Dは、「和林兵馬劉公去思碑」である。「和林」はカラコルムのことであり、その地で「兵馬」という役職にあった劉天錫が、任期を終えて漠地に帰還する際に、功績を称え、1331年に立石された碑である[村岡2013、2015]。バーサンスレン2011:24の写真に見え（写真8）、これもソヨンボがかすかに見え、この碑の碑陰であることがわかる（写真9）。左後方に現存する「ダライ・ラマ廟」が写り込んでいるが、この廟は「野村日記」図中のであり、位置を考えると間違いない。その後、21世紀初頭までは「嶺北省右丞中総管収粮記」と並んで草むらに放置されていたが、現在は、エルデネ・ゾー内のチベット様式のツォクチェンという大経堂前にある祠の中に入れられている。

最後に残ったEは、バーサンスレン2011:64の写真に見える碑である（写真10）。左後方にゴルバン・ゾーの入り口が見える。現在は若干移され、かつて「劉公去思碑」があった場所（図4のD）の手前に上下二つに分かれて置かれている（写真11）。写真10では割れ目は見えるものの、かつては重ねられていたことがわかる。後世、碑面全体がきれいに磨かれ、新しくチベット文字が大きく彫られたようであるが、これも、もとはモンゴル帝国時代の何かの碑文であったとすれば、文字が消されたのは、たいへん残念なことではある。

エルデネ・ゾー内にあったこれらカラコルム関連碑文は、モンゴル・元朝時代のモンゴル高原を知る上で重要な史料であり、これまでも、ビチェース・プロジェクトで各碑文について研究がなされてきたのは、すでに述べた通りである。これらの碑が20世紀初頭時点で、どこにどのようなにあったのか重要な情報を伝えている探検隊の記録は、この点でも貴重な資料と言えよう。

4. 探検隊が記す交通路の拠点としてのエルデネ・ゾー

前節では、文献学的観点から、探検隊が注目した碑文について取り上げたが、仏教徒である彼らにとって、エルデネ・ゾーは様々な点が興味を惹く所であった。16世紀末の建立以来、長くモ

ンゴル人たちの仏教信仰の中心地であり、最盛期には1万人もの学僧が学んでいた。19世紀末から20世紀初めにかけても、1500人もの僧がおり、そのうち500人は寺院に常住して読経を行っていたという〔ハタンバートル／ナイガル 2005：94、清水 2012：59〕。彼らは寺院内の僧房に暮らしていたが、1938年の革命政府の弾圧により多くの建物が破壊され、現在は往時の様子を忍ばせるものではなく、その頃のにぎわいの様子を記す資料も数少ない。その中で、探検隊は、1908年8月23日にエルデネ・ゾーに到着し、3泊の短い間ではあるが、滞留した。彼らの記録は、その当時のエルデネ・ゾーを知る貴重な資料と言える。ここでは、そこからわかる、当時のエルデネ・ゾーの盛況ぶりとその意義の一端を示すことにしたい。

野村は東南門⁷⁾より入城した後について、次のように記述している。

附近に大寺あり。門内より左折して一新築家屋に導かる。松材を以て建築し、形は氈帳に似て床板を張る。入蒙以来此の如き家を初めて見たり。榭廊を附し、松丸太を以て塀を作る、到着午後三時三十分【462】。

彼らに宿舎として当てがわれたのは、東南の門を左折した新築中の家屋（図3のH）であった。形状は氈帳に似ているというから、今でも各地のツーリストキャンプに見られる固定式のゲル（モンゴル語で移動式天幕を言う）であったのだろう。ゲルは通常、羊のフェルトでできているが、松材で造ってあるというので、バーサンスレン 2011の表紙にある写真に見えるようなものであったと考えられる（写真12）。確かに、これまで彼らが旅してきたモンゴルの草原では、決して見ることはなかったものであったろう。

いずれにしても、当時、エルデネ・ゾーで活動するラマ達の僧房が数多く城内にあったことはこれまでもわかっていたが、そのほかにも、探検隊一行のような訪れた者達を宿泊させるような施設があったことは注目されよう。

また、野村は「八月二十六日」で、城内の様子を次のように記している。

壁上に林立せる白塔の間より廟宇の赤緑の瓦影隠して、千里不毛の地を跋涉して来れる旅人の目には、一層壮麗の観を生ぜしむるのみならず、元時の繁盛を追憶せしむるに足る【464】。

エルデネ・ゾーは中央に位置する「イフ＝ツォクチン＝ドカン」（現存しない）という殿堂を中心に、ラマ達の住居が建ちならんでいた。その他にも、廟堂や家屋が数多くあり、細く狭い道路ながら、秩序ある街並みを形成していた。ラドロフの写真でも、寺院内に多くの建物があるのがわかる〔ラドロフ 1892：XXXVII-III〕。バーサンスレン 2011も多くの写真を載せている。前述の東南門の前に立つ「翺建三靈侯廟記」の東側にも、建設中の一鐘楼があったというから〔172〕、いまだ建設途中の建物もあり、大いに賑わっていた。エルデネ・ゾーはまさしく「仏教都市」であった。

さらに、注目すべきは、探検隊がここで行なった、モンゴル西部さらに中央アジアへ向かうための準備である。

「八月二十四日」

土謝図汗より二人の委員来る。余等の探遊に付所要の事を告ぐ。委員云ふ、理藩院の護照無きを以て応ずるを得ずと⁸⁾。然かも遂に乞を容れて、所要を弁せんと云ふのみならず。哈喇巴勒噶孫^{ハラバラス}に家なければ、明日他より三戸を移置せんと諾せり【462】。

当地はトシェート・ハン王の直轄地で、王より派遣され、一行の護照を確認するべくやってきた二人の委員に、彼らは数回交渉の末、駱駝や馬を借用することができたともいう【182】。

さらに「八月二十五日」には

是起城壁及城内を測量し、帰りて朝食後再び城内の建物、廟、碑の位置等を測量す。橘氏は撮影に赴けり。地図を作り終わりて支那商店あるを聞き、北門の北の其の店舗に到り、砂糖六斤及点心を銀一両にして購ふ【462】。

とある。彼らは、中国からの商人がこの地に滞留していると聞き、城の北門（現在の西門）を出てこれを訪ねたという。彼らは、家屋内に商品を陳列して客を待っていた。商品は、茶、菓子、砂糖、綿布、米、燐寸、線香、嗅煙草などであり、旅行者が必要とする物が一通り揃うようになっていたことがわかる。この地は大集落であり、絶えず中国商人がやって来て滞留するという。探検隊は、これからの旅に必要な品を得ることができたのである【183】。

かつて、13～14世紀のモンゴル帝国時代、帝国の都であったカラコルムにはイスラム教徒たちの街区があり、そこには市場があつて、多くの商人でにぎわっていた。居住する人々が購入するのはもちろん、旅の途中にこの地に滞留する者たちも、必要な品を買い込んで次の目的地に向かっていった〔宇野／村岡／松田 1999：42〕。カラコルムから南方へ向かえば、中国本土へ、西方へ向かえば中央アジアへの交通路が延びていた。モンゴル帝国時代から600年以上を経た20世紀初頭においても、中国から中央アジアへと探検を企図した大谷探検隊にとって、かつてのカラコルムの地にあるエルデネ・ゾーは、モンゴル帝国時代と同じように、重要な中継地点となっていた。

実は、この状況は、モンゴル帝国時代に始まることではなかった。それよりさらに500年以上前、8～9世紀、唐王朝の時代、唐の都である長安から中央アジアへ向かう際、すぐ様思い起こされるのは、そのまま西方へ向かう交通路であろう。一般にシルクロードと呼ばれる交通路である。しかし、別に、まず北方へ向かい、当時、モンゴリアで隆盛を極めていたウイグル遊牧帝国の都であったオルド・バリク（現ハルガルガス遺跡）を経由して、その地で様々な必需品を補給し、そこから一転、西南に向かい、アルタイ山脈を越えて中央アジアへ向かうという交通路もよく使われた。いわゆる「回鶻路」である〔中田／村岡 2018、村岡／中田 2020〕。オルド・バリクはカラコルムに近く、同じオルホン河流域の平原にある。

橘は、「北方民族の全般を考覈するには必ずエルデネ・ゾーを中心としなければならない」と述べており【175】、これは、オルド・バリク、カラコルム、エルデネ・ゾーのあるオルホン平原が古来より遊牧国家の中心地であり、その地から、中国本土への交通路、中央アジアへの交通路が延びていたことを理解していたものであり、彼の歴史認識の深さを示す言葉と言える。その後、

橘・野村は、オールド・バリクや突厥第二可汗国の根拠地であったホシヨ・ツァイダムを探索した後、前述のハダットまで一気に南下し、預けた荷物を受け取り、西方に向かい、アルタイを越えて中央アジアへ向かうことになる⁹⁾。

第二次大谷探検隊が、中国からモンゴル高原を経由して中央アジアへの大旅行を敢行することができた要因の一つとして、その中間地点のオルホン平原に、エルデネ・ゾーが存在していたことがあった。エルデネ・ゾーは、本来の仏教寺院としての意義以外にも、唐代のオールド・バリク、モンゴル帝国時代のカラコルムというそれぞれの時代の都に匹敵する交通路の拠点として、重要な意義を持っていたのであり、それが大谷探検隊の記録によって裏付けられる。探検隊のモンゴル調査の記録の重要性を見直す必要を説くゆえんである。

おわりに

第二次大谷探検隊のモンゴル調査の記録から明らかとなることをまとめると、次のようになる。1908年にクーロンから西方へ向かった彼らは、途上で立ち寄った仏教寺院について詳しく記している。30年後の1937～8年ごろ、革命政府の弾圧によって、数多くの寺院が破壊されたこともあり、彼らの記録は、旅程の中で体験あるいは見聞した仏教の隆盛を語っており、当時のモンゴルの仏教信仰や寺院の状況を知る上で、貴重な資料を提供してくれている。今後のさらなる研究が必要である。また、いまだ探検隊がたどった経路に明確ではないところも多く、実地調査も含めた調査が不可欠である。

エルデネ・ゾー僧院に関して言えば、探検隊の記録からは、20世紀初頭、僧院内には数多くの建造物があり、ラマが居住する家屋、訪れる参拝者、旅行く者の宿泊施設として利用され、数多くの人々が訪れる当時の隆盛ぶりが窺える。宗教弾圧前のエルデネ・ゾーの写真は、ラドロフ 1892、バーサンスレン 2011はじめ数多く残っているが、探検隊の記録のように、言葉で表現されものはほとんどない。また、僧院内にはモンゴル帝国時代のカラコルムに係る碑文が数多く残され、現在はその多くがカラコルム博物館に移管されたが、まだ寺院内に残るものもある。このように、100年前の僧院内の賑わい、モンゴル帝国時代の碑石の状況を知る上でも大谷探検隊の記録は重要である。

そして、橘・野村は、20世紀初頭において、エルデネ・ゾーは、寺院としてだけでなく、多くの商人でにぎわう市場や旅行く人々のための宿泊施設の存在、それらから、中国本土からモンゴル高原を経由して、中央アジアへ向かう人々にとって重要な交通路の拠点として機能していたことを明らかにしてくれている。それは、唐代のオールド・バリク、モンゴル帝国時代のカラコルムという重要な都市に匹敵するものであった。第二次大谷探検隊のモンゴル調査の記録は、モンゴル高原の広い地域に記述が及んでいる。彼らの記述に基づく総合的な実地検証こそが、今後の重要な課題であろう。

注

- 1) ただし、相馬／エンフジャルガル 2019によれば、両氏は現地調査を実施したということである。今のところ、その成果は人文地理学会大会の研究発表要旨として残るのみであり、今後、論考あるいは書籍として上梓されるのを期待したい。
- 2) クーロンにおける探検隊の行動や彼らの調査行を手助けするべく労を取った人物については、北村 1998：73-76に詳しい。参照されたい。
- 3) 橋が現地で使用したと思われる中国語の地図には「哈達図」は見当たらない〔120-121〕。また、同じく使用したであろうロシア語の地図は、印刷が悪くて判読が難しい〔23、119〕。
- 4) 橋 2001「駅亭並びに訳解」にも、「哈達図」のモンゴル文字表記と訳解として「岩ある」と正確に説明を付している〔333〕。
- 5) 相馬／エンフジャルガル 2019には、両氏の現地調査が野村 1937に基づいていること、橋・野村の「1908年8月19日（水）ハタット出発～9月21日（月）ホブド到着までの35日間を対象とした」ことが記されている。両氏は「ハタット」を特定しているのかもしれない。本文に挙げた地名についても、その多くは比定できているようである。両氏は、野村 1937に見える114件の地名のうち、特に滞在した軍台名の70%がそのまま現在も用いられ、經由地点名の73.9%が固有地名との整合性が見られ、確認・特定ができなかったものは7件であったと言う。その意味でも詳細な研究成果の公表が待たれる。
- 6) 「フレー」とは、移動式の寺院を中心とする地点であり、モンゴル帝国時代、遊牧集団が円陣を組んで野営し、それを「クリエン」と呼んだのが語源である。前述の庫倫（クーロン）もフレーに由来する語で、かつて、「イフ（大きな）・フレー」と呼ばれており、活仏を中心とした移動式のゲル寺院が各地を転々とし、1778年に現在のウランバートルの地に定着したという〔菅沼 2004：16〕。
- 7) エルデネ・ゾーは四面に各一門を設けており、探検隊はその四つの門のうち、最も大きく、当時、南門と呼ばれた正門から城内に入った。野村はこれを「東南門」と正確な方角で呼ぶが、現在は「東門」と呼ばれ、通常は出入りができなくなっている。現在では、かつての西門（西南の門）が「南門」と呼ばれ、観光客が出入りするなど、正門のような役割を果たしている。当時の呼び名と現在の呼び名では、時計回り90度のずれがあることは注意を要する。
- 8) 探検隊が、清国外務部発行の護照（査証・ビザ）のみを携行し、理藩院の護照を持っていないことから、モンゴル各地で困難を極めたことは白須 2022に詳しい。白須は、当時のモンゴル域は清国の「藩部」であり、理藩院の管轄下に置かれ、在地官吏が外務部の護照が通用しないと主張したことになり、当時の清国のモンゴル統治のあり方を反映していると指摘する〔白須 2022：14-15〕。探検隊の記録が、このような実状を知る上でも重要な資料であることを示してくれている。
- 9) 探検隊によるハルガルス遺跡やホショ・ツァイダムの調査の重要性は、すでに北村によって指摘されている〔北村 1998：78および81〕。「野村日記」には詳細な記録と共に多くの図版が残されているが、それらについても、これまでの研究において十分にその意義は認識されてこなかった。現地検証を含めた考察が今後の重要な課題であろう。彼らは、ここでも碑文の採拓を行なったが、それら拓本の所在も不明である。

参考文献

- 磯貝健一／矢島洋一 2007：「ヒジュラ暦742年カラコルムのペルシア語碑文」『内陸アジア言語の研究』22、pp.119-156（松田・オチル2013、pp.237-266に再録）。
- 宇野伸浩／村岡倫／松田孝一 1999：「元朝後期カラコルム城市ハーンカー建設記念ペルシア語碑文の研究」『内陸アジア言語の研究』14、pp.1-64。
- 北村高 1998：「第二次大谷探検隊のモンゴルでの調査について」『東洋史苑』50・51合併号、pp.67-84。

- 白須浄真 2022:「清国の档案資料が語る第二次大谷隊(1908-1910)の当初の計画—在清国公使・林権助の公信、清国・外務部発給の護照、清国・新疆省の檔案との相関—(上)」『龍谷史壇』155、pp.1-24。
- 菅沼晃 2004:『モンゴル仏教紀行』、春秋社。
- 相馬拓也 2014:「モンゴルを旅した2人の考古学者—鳥居龍蔵と野村栄三郎のフィールドワーク再考—」高濱秀先生退職記念論文集編集委員会〔編〕『ユーラシアの考古学』、三一書房、pp.33-47。
- 相馬拓也／P.エンフジャルガル 2019:「考古学徒・野村栄三郎の旅したモンゴル高原—『蒙古新疆旅行日記』をめぐる追憶のフィールドワーク—」、人文地理学会大会研究発表要旨、pp.100-101。
- 橘瑞超 2001:『使命記』、発行人・橘照嶺。
- 中田裕子／村岡倫 2018:「アルタイ地方におけるモンゴル帝国時代の仏像の発見とその意義—2016年現地調査報告をかねて—」『東洋史苑』90、pp.1-37。
- 中村淳 2013:「創建三聖侯廟記(1339)」松田／オチル2013、pp.131-142。
- 野村栄三郎 1937:「蒙古新疆旅行日記」上原芳太郎〔編〕『新西域記』下巻、有光社、pp.439-555。
- ボズドネフ原著／東亜同文会編纂局翻訳 1908:『蒙古及蒙古人』、三省堂。
- ボルジギン・フスレ 2011:「明治時代における日本人の外モンゴル調査」『学苑』845、pp.112-121。
- 松井太 2013:「和寧郡忠愍公廟碑(1327)」松田／オチル2013、pp.33-45。
- 松川節／松井太 2013:「嶺北省右丞中総管収粮記(1348)」松田／オチル2013、pp.175-193。
- 松田孝一／オチル〔編〕2013:『モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究』ビチエース・プロジェクト成果報告書、大阪国際大学。
- 村岡倫 2012:「大谷探検隊のエルデニ・ゾー寺院調査」『BARC 2011年度第1回シンポジウムプロシーディングス 大谷探検隊をめぐる新研究』、龍谷大学アジア仏教文化研究センター、pp.31-39。
- 2013:「和林兵馬劉公去思碑(1331)」松田／オチル2013、pp.47-60。
- 2015:「『和林兵馬劉公去思碑』より—元代カラコルム行政の一端—」『九州大学東洋史論集』43、九州大学文学部東洋史研究会、pp.1-21。
- 2020:「コラム 大谷探検隊のモンゴル調査」楠淳澄・中西直樹・嵩満也〔編〕『国際社会と日本仏教』、丸善出版、135-138。
- 村岡倫／中田裕子 2020:「モンゴル西部における東西文化交流の拠点—2017年ハルザン・シレグ遺跡調査の報告とその後—」『国際社会文化研究所紀要』22、pp.93-117。
- 李文田撰／羅振玉校定 1929:『和林金石録』(『石刻史料新編』第2輯第15冊所収、新文豊出版公司、1979)。
- ラドロフ 1892: В.В.Радлов, *Атлас бревностей Монголии Трубы орхонской экспедиции*, Санкт-Петербург.
- ハタンバートル／ナイガル 2005: Хатанбаатар, Н, Найгал, Ё, *Эрдэнэ зуугийн түүх (XVI-XX зуун)*, Монголын үндсний Түүхийн музей, Эрдэнэ зуу музей, Улаанбаатар.
- 清水奈都紀〔訳〕2012: N.ハタンバートル／Yo.ナイガル著、A.オチル監修『エルデネ・ゾー史(16-20世紀)』、大谷大学。
- バーサンスレン 2011: Х.Баасансүрэн *Erdene Zuu: The Jewel of Enlightenment*, Edited by Glenn H Mullin, Монгол улс.

〈付記〉本稿は、最初に述べたように、橘・野村がたどったモンゴルの旅程を、何年かにわたって現地で検証・調査した成果である。特に、2018年8月には大島博行氏とカラコルム博物館の研究員エンフメンデ氏に様々な便宜をはかったいただき、2022年9月には、両氏のほかにムンフバト氏、そして本学研究生の小池翔平氏と共に、橘・野村にならって馬に乗って旅程をたどるなど、有意義な調査ができた。4氏には記して感謝の意を表したい。

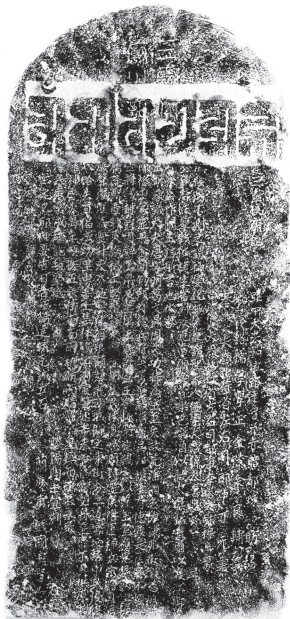
〈謝辞〉本稿は世界仏教文化研究センターおよびJSPS 科研費18H00726の助成を受けた研究成果の一部である。



1 イルデン・ベイリン・フレーの山肌の文字
(2018年筆者撮影)



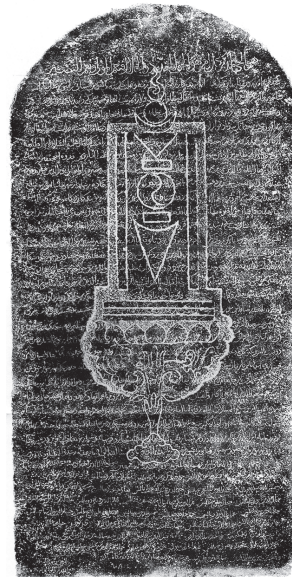
2 エルデネ・ゾー 手前が東南門
(2019年松川節撮影)



3 中村 2013 : 132



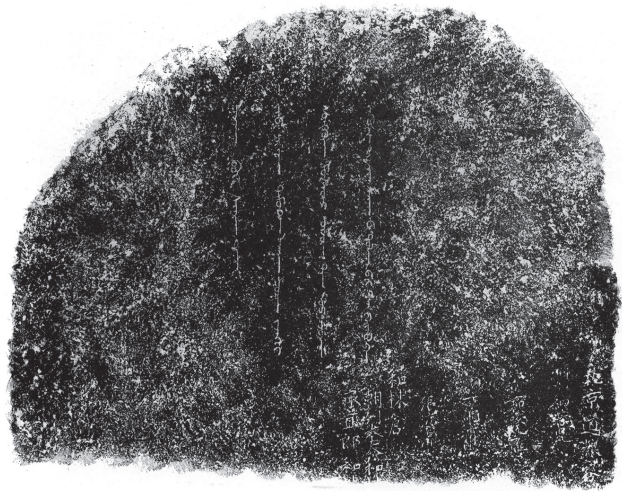
4 パーサンスレン 2011 : 26-27より



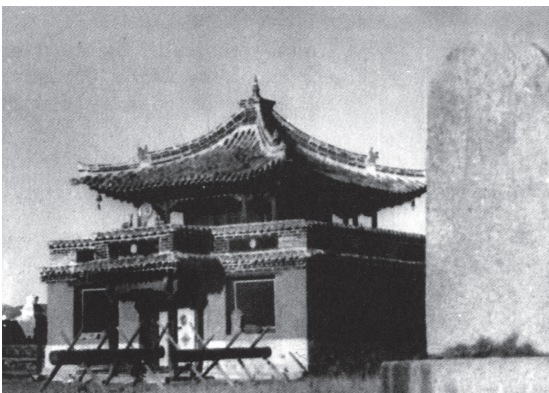
5 磯貝・矢島 2013 : 239



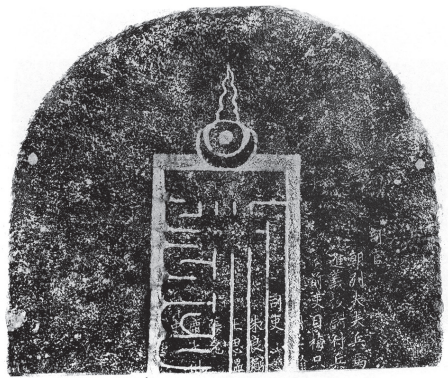
6 パーサンスレン 2011 : 38



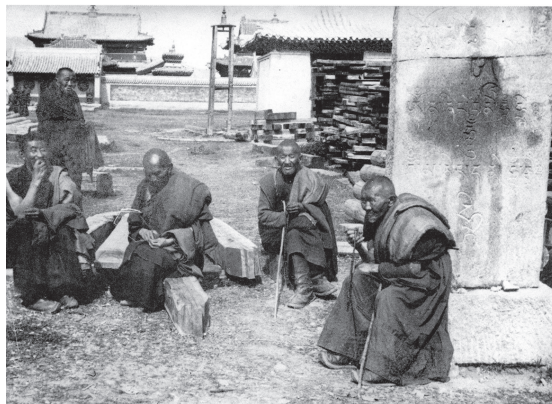
7 松川・松井 2013 : 177 碑陰上部



8 パーサンスレン 2011 : 24



9 村岡 2013 : 49 碑陰上部



10 パーサンスレン 2011 : 64



11 (2022年筆者撮影)



12 パーサンスレン 2011 表紙